

FLORA KANAGAWA

Oct. 10. 2002 No. 53

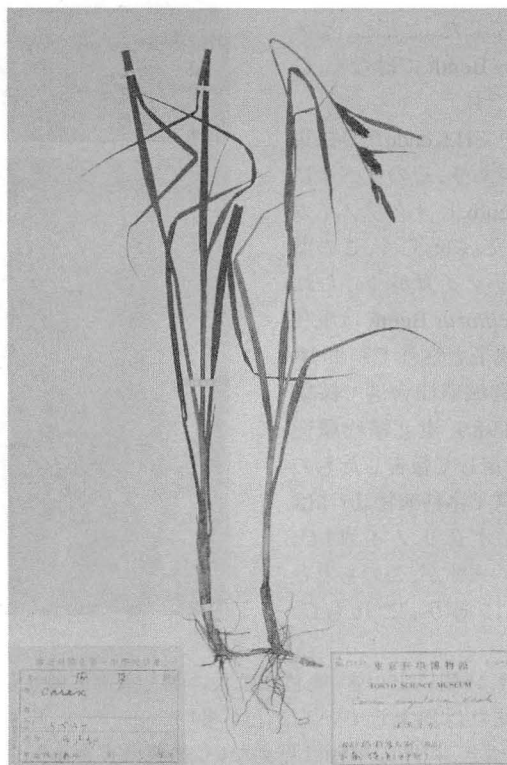
神奈川県植物誌調査会ニュース第53号

〒250-0031 小田原市入生田499 県立博物館内 神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846

e-mail katsu@nh.kanagawa-museum.jp

郵便振替 00230-5-10195



発見されたオオクグの標本(本文637頁を参照)

勝山輝男: 神奈川県のカリノイガ属植物	636
埜村恵美子・和田良子・菊池真知子・野津信子: アフリカヒゲシバ	637
勝山輝男: 明治末の横浜にオオクグがあった	637
勝山輝男: 芦ノ湖西岸のニコゲヌカキビはホオキヌカキビである	638
田村 淳: 横浜のカラクサイヌワラビ	638
浜口哲一: 二つ葉のヒトツバテンナンショウ	639
金子紀子: ツメクサダマシ, 63年ぶりに再出現	640
田中徳久: 神奈川県新産の帰化植物—シバツメクサー	640
浜口哲一: カナムグラの逆刺	641
事務局: 2002年度総会報告	641

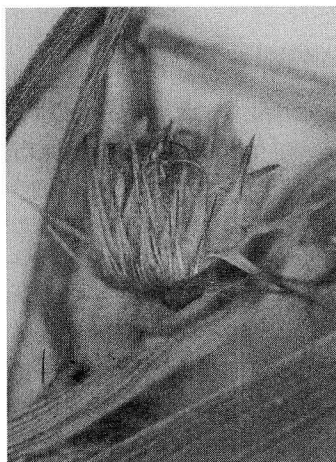
神奈川県のカリノイガ属植物

(勝山輝男)

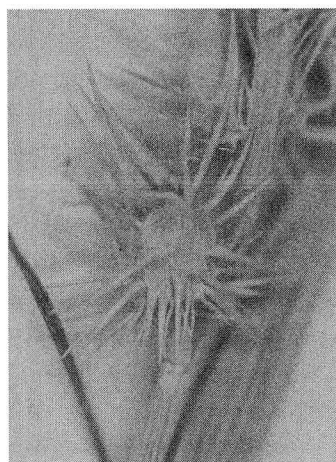
日本に帰化しているカリノイガ属植物について調べる必要が生じ、国立科学博物館、東大、京大、頌栄短大のカリノイガ属の標本を再検討しました。その眼で神奈川県産のカリノイガ属の標本も見直してみました。『神奈川県植物誌2001』のカリノイガ属はシンクリノイガ *Cenchrus echinatus* L.のみで、横浜市中区山下埠頭と鶴見区大黒埠頭の2点の標本があります。山下埠頭のもはシンクリノイガ、大黒埠頭のもはヒメクリノイガ(=ヒメクリノイガモドキ、メリケンカリノイガ)でした。ただし、ヒメクリノイガは *C. pauciflorus* Benth.ではなく、*C. longispinus* (Hack.) Fernardです。

京都大学に1958年に神戸でH.Kondo氏が採集した *C. longispinus* の標本があり、そのラベルには「*Cenchrus pauciflorus* Benth. ヒメクリノイガ(新称)」と書かれていました。おそらく、この標本の植物に和名のヒメクリノイガがつけられたものと思います。*C. pauciflorus* Benth. は現在は *C. incertus* M.A.Crutis の異名とされています。ヒメクリノイガモドキは宮城県仙台港で採集されたものを庄司ほか(1989 東北植物研究(6):11)が *C. longispinus* と同定して報告したものです。藤本義昭(1995 兵庫県イネ科植物誌)にはメリケンカリノイガ(オオカリノイガ) *C. tribuloides* L. が図示されていますが、このもととなった標本は頌栄短大にあり、これも *C.*

longispinus でした。したがって、ヒメクリノイガ = ヒメクリノイガモドキ = メリケンカリノイガとなります。



シンクリノイガ(山下埠頭産)の総苞



ヒメクリノイガ(大黒埠頭産)の総苞

- A. 総苞は花序に少なくとも15個以上つき、総苞には太い刺と基部に輪状に並ぶ剛毛状の刺がある。太い刺は熟しても直立または斜上していることが多い
 - B. 花序には密に総苞がつき、花序の中軸は見えない。総苞は長さ4-5mm、表面には細毛が密生する カリノイガ *C. brownii*
 - B. 花序はやや疎らに総苞がつき、花序の中軸が見える。総苞は長さ6mm、表面にはやや長い白色軟毛が密生する シンクリノイガ *C. echinatus*
- A. 総苞は花序に6-10(稀に15)個つき、総苞には太い刺のみがある(基部にやや細く短い刺があっても、それは剛毛状ではなく、太い刺からしだいに細くなり連続している)。刺は熟すと著しく開出または反り返る
 - B. 総苞は長さ7-8mm
 - C. 総苞の刺は数個-30個、刺の基部の幅は1.5-2mmあり、総苞基部に熟すと下向きになる短い刺はない *C. incertus*
 - C. 総苞の刺は45-75個、刺の基部の幅は1mm以下、総苞基部に熟すと下向きになる短い刺がある ヒメクリノイガ *C. longispinus*
 - B. 総苞は長さ10-15mm オオカリノイガ *C. tribuloides*

クリノイガ *C. brownii* Roem. & Schult. は琉球や小笠原でもきわめて稀なようで、東大、京大、科博の標本では、琉球のものが1点、小笠原のものが1点の計2点しかありませんでした。本土のものでは大阪府堺市で1964年に採集されたものが京大に1点あっただけです。クリノイガと同定されていた標本のほとんどはシンクリノイガで、一部がヒメクリノイガでした。また、オオクリノイガ *C. tribuloides* も間違いが多く、長野県産の1点(科博)が確認できただけで、他のオオクリノイガとされていた標本はすべてヒメクリノイガでした。

632頁下にクリノイガ属の検索表を示します。

アフリカヒゲシバ

(埜村恵美子・和田良子・
菊地真知子・野津信子)

2002年8月17日、植物観察に藤沢市遠藤・笹窪谷へ行ったとき、森の手前の畑のそばに車を止めると、そこにオヒシバに似たみなれない総をもつ植物を見つけました。出穂したばかりのは、穂状花序の13~15本の総(長さ8~10cm)の先のみが軽く付着し下方は膨らんで、ちょうちんのような形をしていて、それが開花につれて、掌状に開出していました。ほふく枝は太く、長く0.5~1mくらい伸びて、13~17cmの間隔で節部から根と直立する稈を出していました。

帰宅後、『増補イネ科植物図譜』(長田 1997)で調べ、アフリカヒゲシバ *Chloris gayana* Kunth と分かりました。『神奈川県植物誌2001』をみると、1980年の横浜市鶴見区と1986年の横須賀市の記録があるのみなので報告いたします。

9月1日、再度現地を訪れました。野草の生い茂った5段(1段は100坪位)の休耕畑の中の3段は、イヌビエ、エノコログサ等が少し混じっていますが、一面にアフリカヒゲシバが生い茂って、開花・結実していました。

明治末の横浜にオオクグがあった

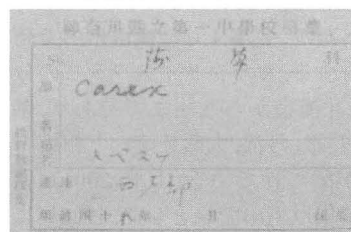
(勝山輝男)

国立科学博物館のオオクグ *Carex rugulosa* Kük. (カヤツリグサ科)の標本の束の中に、横浜で採

集されたオオクグの標本が2枚あった。『神奈川県植物目録』(1933)、『神奈川県植物誌』(1958)のいずれにもオオクグの記録がないため、『神奈川県レッドデータ生物調査報告書』や『神奈川県植物誌2001』の標本調査の対象に含めなかった。今回、伊豆諸島三宅島のオオクグの文献記録を確かめるために、国立科学博物館の標本をチェックしたが、三宅島のものはなく、かわりに横浜産の標本を偶然に見出すこととなった。神奈川県に現在オオクグはないが、過去の貴重な記録として報告しておきたい。

見出された1枚はTNS57510で神奈川県立第一中学校のラベルが貼られ、和名にはトベスゲ、産地として「西戸部」、日付は「明治四十」に読み取れない文字が追記してある。明治は44年までなので、1907~1911年の間に採集されたものと思われる。採集者は国立科学博物館のラベルの方にのみあり、松野重太郎とある。もう1枚はTNS57511で国立科学博物館のラベルのみが貼られていて、採集者は「久内清孝」、産地は「武蔵横浜」とだけ書かれている。国立科学博物館のラベルの番号が連続しているので、2枚の標本は同じ頃に同じ場所で採集され、何かの機会に同時に国立科学博物館に入れられたものと考えられる。西戸部は横浜駅の南西方向で、かつては平沼の干潟がひろがっていた。当時の平沼ではシバナも採集されているので、オオクグがあっても不思議はない。

ところで、松野が中心となった『神奈川県植物目録』(1933)にオオクグの記録はない。オオクグの和名と学名は国立科学博物館のラベルにのみあり、神奈川県立第一中学校のラベルには「トベスゲ」の和名が書かれている。このことから松野らはこの植物をオオクグと同定していなかったと思われる。『横浜附近植物目録』(松野 1917)にヨコハマスゲ *Carex* sp. という名ぞのスゲ属植物の名が出ているが、あるいはこの標本がヨコハマスゲと呼ばれたものではないかと想像している。



TNS57510の
オリジナル
ラベル

芦ノ湖西岸のニコゲヌカキビはホオキヌカキビである

(勝山輝男)

『神奈川県植物誌2001』のニコゲヌカキビ *Panicum lanuginosum* Elliottの分布図の芦ノ湖西岸にある黒い分布点はホオキヌカキビ(別名ケヌカキビ) *Panicum scoparium* Lam.であった。

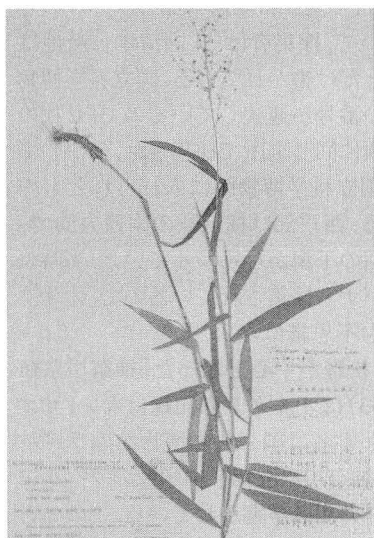
ホウキヌカキビはニコゲヌカキビに似るが、全体に大きく、節の直下に輪状に腺があり、茎の上部や葉鞘にも所々に腺がある点が異なる。ニコゲヌカキビ同様に *Dicanthelium* 亜属に属し、多年草で根生葉があり、春から夏には枝が少ないが、秋になると上部の葉腋から多数の小枝を出し、小型の葉をつけ、その枝先に小さい花序をつける。全体に白色開出毛があり、ビロード状を呈する。夏には高さ1mになり、春から夏の茎葉は長さ5-15cm、幅10-15mmあり、小穂もニコ

ゲヌカキビに比べて一回り大きく、倒卵形で長さ2-2.5mmある。

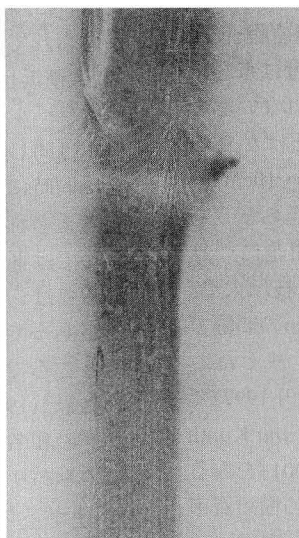
芦ノ湖の標本をニコゲヌカキビと同定したのは私である。*Dicanthelium* 亜属で全体に密に毛があることから、よく調べもしないでニコゲヌカキビとしてしまった。

ホウキヌカキビは北アメリカ原産で、1977年に京都府宮津市で気づかれ、村田源(1980 植物分類地理 31: 213-214)が日本新産の帰化植物として報告したものである。ケヌカキビは兵庫県産の標本を藤本義昭(1995 兵庫県イネ科植物誌)が *P. laxiflorum* Lam.として報告したものであるが、頌栄短大に保管されている該当標本を検討したところホオキヌカキビと同じものであった。

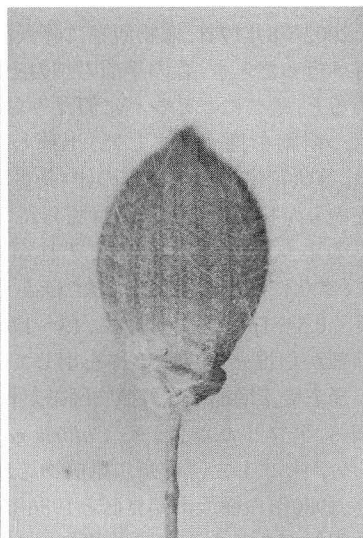
ホウキヌカキビはいまのところ、本州(茨城県、神奈川県、京都府、兵庫県、岡山県)、四国(愛媛県)から報告があり、京都府や兵庫県に多い。



ホウキヌカキビ



節の直下の腺



小穂

横浜のカラクサイヌワラビ

(田村 淳)

県内の相模川以東にカラクサイヌワラビの生育地はなかったが、今年4月に横浜市内で発見したので報告する。カラクサイヌワラビの分布は、国内では北海道から九州までであり、県内では湯河原、箱根、丹沢、大磯丘陵など相模川以西に生育地が限られている(山本, 2001)。県内における相模川以東の記録として、1928年に

故初山泰一先生により三浦半島の二子谷で発見されたという報告がある(倉田, 1978; 長谷川, 2002)が、標本は確認していない。その後三浦半島で発見された記録を聞かない。また、横浜市内においては出口(1968)や、横浜市北西部及び多摩丘陵を詳細に調査した岡(1990)、小崎・北川(1994)の報告にもカラクサイヌワラビの記録はない。そのため、現在のところ相模川以東では貴重な生育地と思われる。

発見したのは旭区内の丘陵地谷底スギ林である。カラクサイヌワラビは2株あり、互いに接近してあった。葉の形態、とくに下部羽片の葉柄が長いこと、小羽片の基部裂片が耳状に大きく発達していることからカラクサイヌワラビと思ったが、羽軸裏面に毛が生えている点が典型品と異なっていた。4月でソーラスが形成されていなかったため、後日再確認しようと考え採集を控えた。標本を採るかわりに写真を撮り、それを山本明先生にお送りしたところ、カラクサイヌワラビが一番近いと思われるが、ソーラスを確認する必要があること、稀に羽軸裏面に毛があるとの返事をいただいた。そこで6月に現地に行き、葉を展開してソーラスを形成したばかりの状態を観察した。ソーラスにはかぎ型や馬蹄型のものがなく、その長さがヒロハイヌワラビに比較して短いことから、カラクサイヌワラビであると確信した。2株で計5枚の葉を展開していたが、採集は今回も控えた。8月上旬に再度現地に赴き、虫に食べられて劣化してきたため、やっと採集する踏ん切りがつき一枚採集した。周囲にはナガボノナツノハナワラビ、ホソバシケシダ、オクマワラビが生育していた。

採集した標本の胞子を検鏡したところ、正常であったためカラクサイヌワラビと決定した。ただし、この株は山本明先生の言うように羽軸裏面に微毛をもつタイプである。標本は神奈川県立生命の星・地球博物館に納めた。

この報告にあたり、有意義なご助言をいただいた山本明先生にお礼申し上げる。

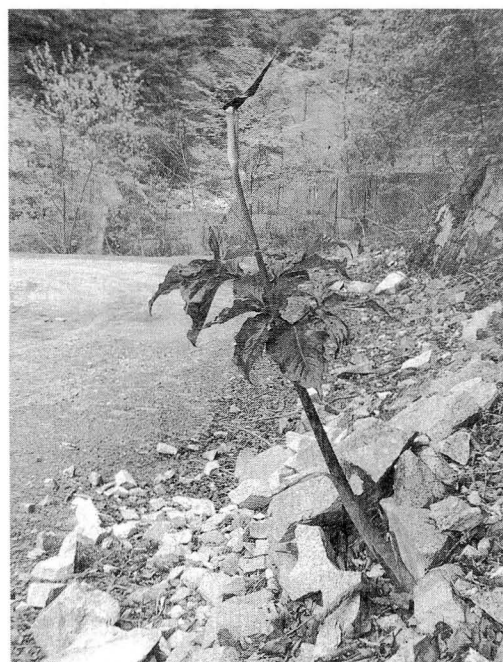
〈引用文献〉

- 出口長男, 1968. 横浜植物誌. 256pp. 秀英出版, 横浜.
- 長谷川義人, 2002. タチヒメワラビ・カラフトミヤマシダ・テバコワラビ. 日本シダの会会報, 3(30): 47-48.
- 倉田 悟, 1978. 三浦半島のシダ. シダ賛歌. pp.165-171. 地球社, 東京.
- 岡 武利, 1990. 横浜北西部のシダ. 神奈川自然誌資料, (11): 131-142.
- 小崎昭則・北川淑子編, 1994. 多摩丘陵のシダ植物—横浜市緑区・旭区を中心に—. 131pp. 多摩丘陵植物調査会, 横浜.
- 山本 明, 2001. メシダ属. 神奈川県植物誌2001. pp.121-127. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 神奈川.

二つ葉のヒトツバテンナンショウ

(浜口哲一)

2002年5月4日に、山北町箒沢の東沢林道、標高約900m付近(三次メッシュ53391077)で立派なヒトツバテンナンショウを見かけた。舷部の真っ黒なクロハシテンナンショウ型のもので、高さが80cm近くもあり、大小2枚の葉がついていた。『日本の野生植物I』(平凡社)によると、ヒトツバテンナンショウの葉は「1(～2)個」とあり、まれに2枚のこともあるらしいが、意識して見たのは初めてだったので写真とともに報告しておく。現地は林道脇の法面から崩れた岩屑の堆積した場所で、それほど条件がよいようには見えなかったが、よほど球茎が大きく育ったものなのだろう。



二つ葉のヒトツバテンナンショウ

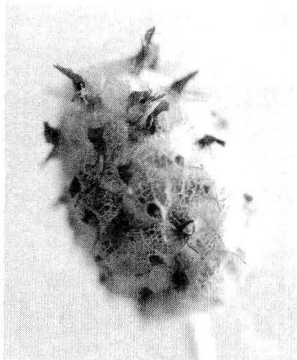
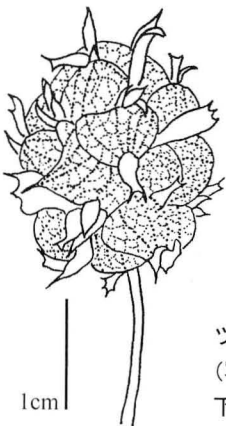
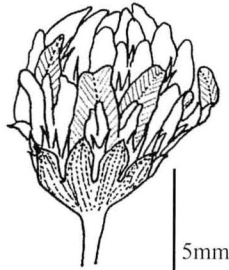
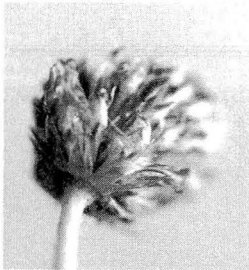
ツメクサダマシ, 63年ぶりに再出現

(金子紀子)

横浜市金沢区白帆は、かつてコンクリートの護岸で囲われた矩形の海で、冬季にはスズガモの大群やウミアイサなどの野鳥が来ていた。埋め立て工事が行われ、ヨットハーバーと大型店舗ができあがったのが1998年である。同所の芝生の中で2002年7月にツメクサダマシ *Trifolium fragiferum* L. を見つけたので報告する。

ツメクサダマシ *Trifolium fragiferum* L.

全体の草姿はシロツメクサに酷似するが、より小さく柔らかい印象がある。シロツメクサのように受粉後に花が垂れ下がらないので気づきやすい。花はモモイロシロツメクサより色が濃く小さい。4mm程度の総苞があるが、萼より色が薄く目立たない。花後、毛の生えた萼が膨らんで、豆果を包み、豆果には1個ずつの種子が入る。豆果は成熟するにつれ萼の膨らみが増すため、縦長になってくる。なお種子が熟す頃になると、豆果を包む萼の毛はほとんど無くなる。花柄、葉柄には細い白毛がまばらに生えるが、根元の太い茎には毛が見られなかった。葉



ツメクサダマシ 左上: 総苞(写真), 右上: 花序, 左下: 実, 右下: 実(写真).

裏にも白毛が生え特に主脈付近には多い。茎は地を這うように伸び、節から根を出す。果実が熟すと花茎の根元から倒れ、頭状花序のまま土に触れ、根を出し新芽が伸びてくる。開花は7月下旬からであった。ただし頻繁に行われている草刈りがどの程度影響しているかは今後の観察を待たないと分からない。

『神奈川県植物誌2001』によると、ヨーロッパ原産の帰化植物で、『日本帰化植物図鑑』(長田1972 北隆館)に1939年に採集された横浜産の標本が図示されているが、その後確認されていない。今回の発見は実に63年ぶりの再発見である。標本: 横浜市金沢区白帆 2002.7.15 金子紀子 KPM-NA0122083.

神奈川県新産の帰化植物

— シバツメクサー

(田中徳久)

八王子にお住まいの会員、歌川道子さんが、生命の星・地球博物館に、最近採集した標本をお持ちくださった。その中に、神奈川県新産の帰化植物、ナデシコ科のシバツメクサーが見出されたので報告します。

シバツメクサー *Scleranthus annuus* L.

茎はよく分岐し、高さ5~15cm、下向きの微細な毛がある。葉は無柄で左右のものが基部で合着する。托葉はない。花は花弁はなく、がく片は5個で、その縁は膜状で白色。花後、がくは残存し、硬化して果実と合着する。ヨーロッパ原産。シバツメクサーの名はもともと栽培品につけられたもので、『原色日本帰化植物図鑑』(長田武正 1976 保育社)に北海道襟裳岬産の標本から描かれた図が掲載されている。『改訂増補 日本草本植物総検索誌 双子葉編』(杉本順一 1978 井上書店)には、同属の園芸植物としてアオバナツメクサー *S. perennis* L. が掲載されている。

標本: 川崎市麻生区南黒川 2002.5.5 歌川道子 KPM-NA0122066.

……などと偉そうに書きましたが、当日、私は留守にしており、同僚の勝山が同定し、翌日、『神奈川県植物誌2001』でナデシコ科を執筆した私に回したものです。その勢いで、Flora Kanagawaの原稿も僭越ながら、私が書くことになりました。一応、ことの真相を……

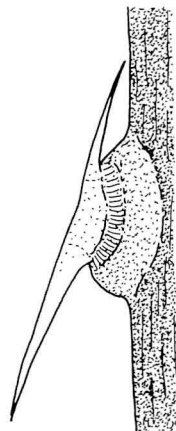
カナムグラの逆刺

(浜口哲一)

相模川で開いた自然観察会でのこと、つる植物の観察の中で、カナムグラの逆向きの刺のようすを見てもらおうと、小型の実体顕微鏡でアップしてみた。すると、見せようとした自分の方がびっくり。なんと、カナムグラの刺は丁字型をしていて、透明で鋭く尖った刃先が上下両方に伸びていたのである。図に示したように、茎や葉柄には盛り上がったこぶがあって、刺はその先についている。そして傾いてついているのが普通なため、一見すると逆刺のように見えるわけだが、長さは下側の方が長いとは限っていなかった。両方向に刺が伸びていることは、いろいろな角度で他物にからんでいく上で有利なことなのかもしれないとも考えられるが、どうなのだろうか。

後日、いろいろな植物図鑑を調べてみたが、すべて逆刺とか小逆刺という表現が使っていて、丁字型にふれたものは皆無であった。

私が細部の形態の記載についてもっとも信頼している『原色野草観察検索図鑑』(長田武正, 保育社)でもそうであったので、これは書き留めておかねばと思った次第である。身近な植物も、丹念に観察をしてみると、見落していることがあるという一例だろう。



カナムグラの刺

2002年度総会報告

(事務局)

2002年度の総会は、4月27日(日)に相模原市立博物館で行われました。第I部では、長谷川義人さんに「琉球の植物」について、浜口哲一さんに「花ごよみの可能性」について講演していただき、第II部で2001年度の事業報告、決算報告がなされ、2002年度の運営体制、事業計画、予算が審議され、可決されました。

●2000年度 事業報告

●2000年度 決算報告・監査報告

●2002年度 予算

●2002年度 運営体制の検討

編集後記

いつもながらFlora Kanagawaの発行が遅れて申し分けありません。それでも、もう1回頑張れば、久し振りの年3号発行です。また、今号は木場が出張中のため、田中が編集作業を行いました(いつもは木場が一人でやっているのです)。違う誌面になっていなければ良いのですが。なお、県博学芸員のメールアドレスが変更になりました。それぞれ、katsu@nh.kanagawa-museum.jp, koba@nh.kanagawa-museum.jp, tanaka@nh.kanagawa-museum.jpです。次号は2月頃、総会の案内と一緒に発送できれば、と思っています。原稿をお寄せ下さい。

●今後の活動内容